

「日本軍政下のサラワク¹における日本語教育施策」

九州大学大学院比較社会文化研究院 松永 典子

1. はじめに

- ・ 研究の着眼点 「南方」占領地²における日本語教育の「多文化」性・「多様化」
日本語学習者・学習目的の多様化 教科書・教材類、教授法の多様化に結びついたか
(文化背景、民族性、年齢層が幅広くなったこと)

教育機関、教育の方法論的特徴・・・「錬成」
多文化接触の機会 接触によるインパクト

2. 「北ボルネオ³」の教育施策の概観

- 1) 初等教育、講習会等による日本語普及。学習者の多様化は見られるが、教科書・教材の多様化は確認できない。
- 2) 学校教育は極めて低調。一般教育もごく限られた範囲で軍政協力要員を養成することが主眼。
(背景) 教育に投入できる人員の不足・軍政機構の不備 ボルネオ守備軍による軍政
- 3) 言語政策 = マレー語が公用語。マレー語が教授用語として使用されたかは不明。
ブルネイ = 日本語が公用語。

3. 「北ボルネオ」軍政と教育方針

1941年12月18日、ミリに軍政本部設置

1942年4月、僅少簡素な軍政要員、軽易な形での軍政実施

軍政に協力する要員が早急に必要・・・「極力現地住民自体の「錬成」を培養すべく指導」

1943年1月、現地住民の教育方式策定

「大和民族を中心とする大東亜建設に挺身参加する人物を錬成する」

- 「従来浸透しつつある物質的見地に立つ英米崇拜思想の芟除」
- 「日本施策に貢献する如き勤労性、技術能力」を教習
- 特に「高等政治経済教育」、学校入学等も奨励しない

4. 教育の方法論

<教科書・教材類>

- ・ サラワクで編纂・発行されたと見られる教科書・教材類は発見されていない
- ・ 国定国語教科書、中国占領地向けの日本語教科書が使用された確率が高い
Cf. 『日本語読本』『ハナシコトバ』
- ・ 海軍占領地域(「南ボルネオ」)で編纂された教科書・教材類が使用された可能性もある
Cf. 『LANGKAH PERTAMA』など

¹ 現在のマレーシア(東マレーシア)サラワク州。

² タイ、インドシナ、南洋群島を除いた南方軍の軍政が及んだ地域を「南方」の範囲と捉える。

³ 日本占領期のみで使用された呼称。現在のマレーシア・サラワク州、サバ州及びブルネイを指す。

<教育方法>

- ・ 初歩的な読み書きの教授 会話教育中心
- ・ 儀式的・身体儀礼的訓練、歌による日本語の普及（文字に頼らないレベルの教育）
勤労（田植え、造園）、学校儀式（ラジオ体操、君が代斉唱、宮城遥拝）の重視
体得できるレベルでの訓練（手工・体操・図画・歌・教練・相撲・剣道）
- ・ メディア（新聞・ラジオ・漫画・映画）や行事（天長節、東条英機来訪）などあらゆる宣伝活動を駆使しての日本語普及

（背景）・教科書と日本語教師の不足、現地の教員の日本語力の未熟さ

5. クチン州における教育施策

<現地での日本の教育への評価> 「強制的な奴隷化教育であった」という表現に集約
サラワクの華語学校 = 抗日運動を支援する機関

<特徴>

- ・ 「クチン日本語講習所」 = 通称「師範組」・・・1942年8月～現地官吏・職員・教員の養成
 - ・ 「北ボルネオ現地住民官吏養成所」・・・1944年2月～官吏養成、「南方特別留学生」の訓練
 - ・ 「クチン国民学校」・・・1943年～2年間
 - * 広範囲ではなく、限定的な普及
 - * クチンの緊密な人間関係・地域性 軍政下への各人各様の対応
- 1) 日本軍政には背を向け、日本語も習わなかった。
 - 2) 生活のため（仕事を得るため）日本語を習い、結果的に日本軍政に協力することになった。
 - 3) 青年指導者としての選抜により日本語を学習することになり、日本軍政に協力した。
 - 4) 日本語学習の動機いかに関わらず、日本語ができたので、比較的積極的に日本軍政に協力する形になった。
 - 5) 日本語は習わなかったが、自宅提供など日本軍政には協力しなければならなかった。
 - 6) 積極的に日本軍政に協力する気持ちがあったわけではないが、日本語ができたので、やむを得ず協力せざるを得なかった（在外邦人二世）。
 - 7) 年齢的に若かったので軍政に協力する仕事には従事しなかったが、比較的熱心に日本語を学習した（日系二世）。

6. ミリ州・シブ州における教育施策

- ・ ミリ：「ボルネオ燃料工産石油工業学校」（南方石油工養成所） 軍政目的に即した日本語教育
技術教育の実施、生徒（マレー系・中国系・インド系） = 「兵補」
- ・ ブルネイ：若者の交換プログラム・・・インドネシア、日本、ミリへ
- ・ シブ：学校の名称 「公民学校」へ

7. まとめ

<多様化の特徴>

- 1) 教科書・教材の使用による読み書き教育は初歩的なレベル以上には進展しなかった。
- 2) 文字に頼らない教育が進められた 日本語の未熟な現地の教員、学習者双方の負担を軽減
- 3) 人々の記憶のひだにある日本語教育への関わり方 各人の境遇と「日本人」との接触が影響

4 劉子政『砂拉越散記』、1997：84。